徒手空拳で日本初のロケットエンジンを 開発した技術者の物語

語り手:垣見恒男さん(成田在住・航空エンジニア) インタビュアー:田中誠明さん(東田中2年・男子)、長谷川陽一さん(東田中2年・男子)





■中島飛行機のこと(前史)

インタビューをした場所は介護老人施設 シーダウォークのロビーで行いましたが、 この場所は旧日産自動車の荻窪工場で す。まずはじめに、垣見さんが入社された 会社とその前身である中島飛行機のことに ついて教えてもらいました。1917年、民営 航空機工業の確立を志して海軍機関大尉 を退役した中島知久平(当時33歳)が群馬 県(現太田市)に「飛行機研究所」を設立し たことに始まり、1931年、中島飛行機株式 会社と改称しました。1941年に中島飛行機 の一式戦闘機が陸軍に正式採用されまし た。日本の航空機・エンジンのメーカーとし て、中島飛行機は、独自に機体やエンジン の開発を行う能力を持ち、自社での一貫生 産を行う高い技術力を備えていた。第二次 世界大戦終戦までは、三菱航空機をしのぐ 日本最大の航空機メーカーで、陸軍や海 軍の戦闘機・偵察機、民間機など、約2万6 千機もの飛行機を作った歴史をもつ会社で した。

国産技術の育成に意欲的だった中島は、 発動機(エンジン)の国産化を目指して、 1924年、東京工場の建設に着手した。群 馬太田で誕生した中島飛行機であったが、 中島知久平は「優秀な人材を確保するため には東京に」とあえて機体と発動機を分け、発動機部門製造の地を東京近郊(荻 窪)とした。前年の1923年に関東大震災が あったので東京の郊外で安全な場所という ことで荻窪を選んだのではないでしょうか。

第二次世界大戦の敗戦で、日本航空機の生産を禁止され、二度と軍需産業に進出できないよう、アメリカにより、中島飛行機は12の会社に解体された。同社の技術者の多くは自動車産業へ転進し、日本の自動車産業の発展に大きな貢献をした。後に垣見さんが入社するのはこの中の富士精密工業(後に日産自動車へ吸収合併される)でした。

■垣見さんとロケットとの出会 い~ペンシルロケットの開発

つぎに、垣見さんがロケット開発を行ったことについて教えてもらいました。戦後、日本のロケット研究がスタートしたのは、1953年です。東京大学教授であった糸川英夫先生がアメリカの研究所を見て回って「ロケット時代の到来」を宣言しました。ジェットエンジンの開発ではアメリカに先を越されてかなわない、ロケットエンジン開発なら追いつき追い越せると糸川先生は考えたということでした。

東京大学生産技術研究所からの要請があり、1954年に当時の富士精密の荻窪工場内でロケットエンジンの地上燃焼実験をしたのが始まりで、その前年、1953年に垣見さんは富士精密へ入社する。元中島飛行機の技術者だった糸川英夫教授が、昔の仲間のいる富士精密にロケットエンジンの共同開発の話を持ち込んだということが事の発端になりました。当時、アメリカと日本のロケットエンジンの技術レベルは大きくへだたっていたが、糸川教授は「頑張れば追いつける」と本気で信じていたようだと垣見さんはおっしゃっていました。

当時荻窪工場の全従業員は1600人。その中から、入社したての若い垣見さんが、その担当に指名された。当時は戦後の食糧難の時代、会社は、ロケットなど未知のも

のに手を出してもメシの種にはならない(も うからない)と考えていたから新米社員の垣 見さんが糸川先生の担当となったとのこと です。

垣見さんもロケットのことは全く知らなかっ た。女性が胸につけるアクセサリーのことだ と勘違いをして、「なぜ、私がそんなものを 作らなければならないのか」と思ったとい う。開発リーダーである糸川博士に聞いて も、「私もよく知らないから、君が勉強してく れ」と言われ、一からロケットのことを勉強し た。当時の垣見さんの残業時間は250時間 を超えた(勤務時間ではない!)。たとえ ば、千葉(注2参照)で研究開発会議があ る。リーダーの糸川教授は参加メンバーか ら出るオーダー(要求)にすべて「はい、や りましょう!」と答える。しかし、その課題(技 術の開発や各種の設計・計算など)をクリア するのは、すべて垣見さんの仕事である。 千葉の会合から2時間以上かけて荻窪の 会社に戻ると夜の10時過ぎ。そのまま朝ま で仕事をした。会合の翌日、必ず糸川教授 から会社に電話が入り「昨日の件はどうなり ましたか?」と言われるからで、「まだやって いません」と答えると、糸川教授が怒るから です。



▲ へ ー、これが日本最初のロケットなんだ! 小さいね。でも、カッコいいね。

荻窪工場には、中島飛行機時代に使われた多くの材料が残っていた。飛行機の機体に使うジュラルミンもたくさんあった。これを

- 収録日: 2005年11月21日- **041 垣見恒男さん**

7

利用すれば、試作機も含めて、多くのロケ ットが作れると思った。また、アメリカが朝鮮 戦争のときに日本のメーカーに発注したバ ズーカ砲の燃料がたくさん残っており、これ も利用できると考えた。当時はパソコンもな く、計算するには計算尺やタイガー計算機 という手動式のものしかなく、肉体労働とも いえるようなきつい仕事だった。そして、2 年足らずの後、1955年、垣見さんが開発し たロケットエンジンを搭載した「ペンシルロ ケット」(直径1.8センチ、長さ23センチ、重 さ200グラム)が完成し、1回目の水平飛翔 実験が国分寺機関銃試射場跡(現在の国 分寺の早稲田実業高校の校庭)で行われ た。水平に飛ばしたのは、当時、郊外の荻 窪といっても空にロケットを飛ばしては危険 と考えての配慮でした。

注1. 旧日産自動車荻窪工場跡に「ロケット発祥之地」と 「中島飛行機・発動機発祥之地」の記念碑があるのは、 このためです。

注2.1953年11月ロケット開発について富士精密から協力の約束をとりつけた糸川英夫教授は翌1954年2月、東大生産技術研究所の研究組織が横断的に協力しあう研究体制として、AVSA(Avionics and Supersonic Aerodynamics)(航空電子工学と超音速航空工学連合)研究班を立ち上げ、この研究体制が以後のロケット開発について指針・方向性を立案した。

ペンシルロケットは、その後、ベビーロケット、カッパー、ラムダ、ミューといったロケットに発展し、現在の大型ロケットにもその技術は継承されている。ゼロからロケット(エンジン)の開発に関わってきた垣見さんは「小さなペンシルロケットの様々な実験で、以後の大型ロケットに役立つ基礎データを取得した」という。特に、「宇宙探査衛星系ロケットは国産技術で開発されたものだから、たとえトラブルが発生しても原因を特定し、検査、修理、新技術に発展させることができるようになっている」と垣見さんが力強い口調で言っていたのが印象的でした。

■垣見さんがロケット開発から 学んだこと、若い人たちに伝え たいこと

垣見さんはロケット開発から学んだこと、 若い人たちに伝えたいことを次のように語り ました。

糸川博士には「できない」という返事は通じなかった。「計算する道具がない」と答えると「それなら、計算する道具を作れ」と言われる。やろうと思えばできる。「こうだからできない」とできない理由を言う前に、どうすればできるかを考えることが大切ということを糸川先生から学んだ。

ロケットの開発で一番苦労したことは、原理はわかっていても、目の前に実物がないこと。今なら新しい自動車を開発しようと思えば、周囲にいくらでも自動車があるから、分解してみるなどもできるが、ゼロからの開発では、それは不可能でした。 また、事故が起きた場合には、技術者には、その原因を究明する義務がある。しかし、ロケットの場合には、遠く宇宙の果てに、事故を起こしたロケットがあって回収できないことも多い。だから、日頃から、徹底して"データ"を残すことが大事だということ。詳細なデータがあれば、事故の原因解明にも役立つ。データを残す方法として、毎日かかさず「日記」をつけることから始めてはどうか。



▲壮大な宇宙を旅する夢。夢の実現への第一歩はこの 小さなロケットからスタートした。

かつては「匠(たくみ)」と呼ばれる熟練した技術者がどこの会社にも、どこの工場にもたくさんいました。中島飛行機でも多くの技術者を社内で教育した。また、代々、そうした技術の伝承がされてきたから、日本の技術は優れたものになった。ロケット作りには、多くの技術者のチームワークが必要で自分の専門分野(得意分野)だけでなく、他の分野のことも勉強しようと互いに競い合って勉強し協力し合った仲間がたくさんい

ました。糸川さんみたいに号令をかける人、 垣見さんみたいに、理論を整理して、必要 な技術を駆使して設計図を書く人、設計図 をもとに、0.1ミリ以下の誤差も生じないよう な正確さを保って試作品を作る熟練した加 工技術者(この方々は、尋常小学校、中学 を出たら会社に入り、旋盤・研磨・加工・切 断等に技術の匠になるために社内学校で 勉強する)、このような人たちがチームワー クよく心を一つにして試作品を作る。これが 富士精密の強み(旧中島飛行機の後継会 社でのち日産自動車と合併)であったと垣 見さんは誇らしそうに話をしてくれました。 ペンシルロケット開発から50年。ようやくここ まで来た、という思いがある。これからの50 年、どんな時代になるのか、若い人たちに 大いに期待している。

注3. 2003年5月に鹿児島県内之浦町のロケット発射場から飛び立って小惑星「イトカワ」に向かった宇宙探査衛星「はやぶさ」は2005年12月に「イトカワ」に到達し最近話題になっている。探査衛星「はやぶさ」は糸川先生が戦争中に戦闘機「隼」の設計者であったこと、日本の小惑星探査の対象である「イトカワ」も、同じく糸川英夫さんにちなんで命名されたものです。また、独立行政法人の宇宙航空研究開発機構(JAXA)の宇宙飛行士の野口総一さんはスペースシャトル「ディスカバリー号」にペンシルロケットの実物を持ち込み糸川英夫先生の英知を披露しました。

【長谷川陽一さんの感想】

僕は今回のインタビューでどんなことをやるか分からず不安でしたが、実際あまりすることがなく、安心していろいろ昔の杉並の事を聞けました。

垣見さんから聞いた話で一番印象に残ったのは、インタビューをした場所が、当時飛行機の発動機(戦争中は、英語が使えなかったためエンジンはこう呼ばれた)の工場があったことです。とてつもなく広かったそうだったので杉並にもすごいものがあったんだなあと感心しました。

ペンシルロケットは実物を見せてもらいました。ペンシルといっても、長さは25cmほどで太さはリコーダーほどでした。とてもシンプルでしたが、その後、宇宙開発のルーツになってすごいなと思いました。なかなかで

- 収録日: 2005年11月21日- **041 垣見恒男さん**

Z

きない貴重なインタビューができてよかったです。

【田中誠明さんの感想】

日本で初めてのロケット開発を行った垣 見さんの苦労を教えていただき大変参考に なりました。特に印象的なのは、リーダーで ある糸川教授のきびしい熱意に応えるため に、徹夜をいとわず仕事をされたこと、本当 に命がけで危険な実験を実施されたことで す。このような熱心に仕事をされる方々の おかげで、今の日本のすばらしい技術がで きていることがわかりました。

【垣見恒男さんの感想】

中学2年というと、そろそろ高校受験に備えて連日勉学に励んでいる年頃でしょう。 夕方は一番眠くなる時間帯だったと思います。約2時間、よく我慢してつきあってくれましたね。

富士精密の荻窪工場からはロケット以外にも「名車中の名車」と言われるスカイラインが生産されました。富士精密は社長でも専務でも部長・課長でも誰にでも「さん」づけで呼んでいました。それだけ、みんな親しいファミリー的な会社でした。そんな雰囲気の会社だったからロケットのような「無から有を生ずる」仕事ができたのではないでしょうか。東大でも生産技術研究所だったからロケット開発が成功したと言われています。本郷だったらできなかったとも言われています。

要は、よい人間関係ができていることが一番重要でしょうね。失敗しても、それを許してもらえる環境も大切な条件でしょうね。責任を他に転嫁しないことも重要です。最後に、座右の銘のように私が心がけていることを紹介します。それは「あ」で始まって「な」でおわる5つのことです。

あわてるな 2. あせるな 3. あたまにくるな 4. あきらめるな 5. あてにするなということです。

これからの長い人生では、色々な苦しいことが起こると思いますが、5つの「あな」を思い出してその壁を乗り越えてください。断崖絶壁に追い込まれた時に「本当のよい知恵」が生まれます。だから一番苦しい時を「チャンス」として活用してください。こうだから出来ない、ああだから出来ないと、出来ない理由を並べても物事は解決しません。壁を乗り越える知恵が必要です。出来ない理由だけを並べ立てる「ダメな大人」の真似だけはしないでください。

これからの日本を背負う人は貴方がた若 い人達です。よりよい日本になるようにお願 いします。

漫画とは人間を描くもの ~作家が作品に込めた"想い"とは・・

語り手:野崎ふみこさん(高円寺在住・漫画家) インタビュアー:河田音珠さん(アオバジャパン・インターナショナルスクール6年・女子)





■プロデビューまでの道のり

今回私は、漫画家の野崎ふみこさんに、インタビューする機会をいただきました。野崎さんの主な作品は、「You are a father!」、「神さまの贈りもの」、「よろしく!マリーン」などです。野崎さんは生まれも育ちも杉並区で、現在高校3年生と高校1年生のお子さんがいらっしゃるそうです。

「どんな子供だったのかな?」という関心から、私はさっそく野崎さんに質問をしました。「小さいころから絵を描くのが好きで、小学校5、6年生でストーリー漫画を鉛筆で描き始めました。初ストーリーは探偵ものです」と野崎さん。ともかく気がついたら絵を描いていたそうです。また運動も得意で、クラスの友達と時間が経つのを忘れて夜遅くまで遊んでいたそうです。「家の中よりも外で遊んでいて、セミ捕りやプールへ行くのが好きな、普通の女の子だった」と答えてくれました。

中学高校生時代は漫画を描かないで、バレーボールに熱中していたそうです。体育系に進むか、美術系に進むか進路に悩んだ末に美術系を選択し、再び漫画家を目指すことになりました。

野崎さんは再び漫画を描き始め、投稿 5、6回目で担当者がつきます。順調に仕 事が進み、担当がついてから2年、22歳の ときに「週刊少女コミック」(小学館)でデビ ューしました。何か絵を描く職業につきたい のではなく、漫画を描く職につきたいとい う、小学校時代からの夢が実現しました。

野崎さん憧れの漫画家は、萩尾望都さんと大島弓子さんだそうです。とくに荻尾さんの大ファンで、荻尾さんは小学館で描くことが多かったので、いつかは会うことができると思い、小学館に投稿し続けたそうです。結局野崎さんは荻尾さんに会えたのですが、あまり話すことはできなかったそうです。

野崎さんはデビュー後一年間、河野やす子さんのアシスタント(背景を書いたり、トーンを貼ったり、消しゴムをかけたりする人)をしたそうですが、その後、忙しくなったのでアシスタントはやらなくなりました。



▲自分で描いているのに主人公の気持ちがわからなく なることもあるのよ。不思議でしょ。

私は野崎さんにいくつか質問させていただきました。それで分かったことは、

(1)漫画について:ラブストーリー、優しい 漫画が一番好き。漫画は読むより描くほう が多い、なぜなら忙しくて読む暇がなかっ たから。でも今では時々、子供が買ってき た本で情報を仕入れたりもする。

(2) 苦労: 漫画のアイディアが浮かばないときは自分を追い込むのではなく、とにかくリラックスする。ストレスを発散するにはコンサートが最高。結構色々なコンサートにいってはしゃぐ。漫画家をやめたいと何度も思ったことがある。それはストーリーが浮かばなかったり、主人公をうまく操れないとき。自分で描いているのに、主人公が何を考え

ているのかがわからなく悩んでしまうことも。 漫画家にとっての大失敗は、野崎さんはやっていないが、原稿を落とすこと。

(3)努力:アイディアを浮かばせる良い方法は、色々な本を読んだり、映画を見たりすることです。 今の自分と昔の自分の変化についても聞いてみました。野崎さんは学生のころより絵を自由に描けるようになり、性格はあまり変わっていないが、少し強くなったもしれないと答えてくれました。

■作品づくりの舞台裏

作品が出来上がるまでには、いろんな段 階があります。まず、あらすじを月に一度、 出版社の担当者とのミーティングで決めま す。細かいことは電話でやり取りしながら決 めていきます。原稿は実際、二週間程度で 仕上げるのですが、作品は一か月に一本 の割合で作っています。野崎さんのご自宅 には仕事スペースがあって、二人のアシス タントが、勉強をかねて、一緒に仕上げをし ています。アシスタントは月4、5回来て、た いてい家に泊まるそうです。野崎さんとは 10年間一緒に仕事をしているので、チーム ワークは抜群に良いそうです。(たとえば) 先生ご自身が、工事現場に取材に行って 写真を撮り、そして家で先生が大まかに描 いた絵をアシスタント見せ、その後に完成さ せるそうです。プロット(話)をつくり、ネーム (セリフとコマ割り)を作ってからバイク便で 原稿を送ります。宅急便で作品を紛失し、 描き直した漫画家がおり、自分はそうしたく ないのでバイク便にした、と教えてくれまし

先生ご自身が好きなストーリーは、私も読ませていただきましたが、台湾でも出版されている「You are a father!」です。お話は、夫より10歳年上の妊婦、雅が突然車の事故で亡くなるところから始まります。

助かったお腹の娘、のこは、なんと妻の生

- 収録日: 2006年1月14日- **042 野崎ふみこさん**

7

まれ変わりでした。しかし夫の柱はそれに 気づかず、大工の仕事と、長女かんなと一 緒に子育てをがんばります。月日を経て、 だんだん二人は、のこが雅の生まれ変わり だと気づいていく、ものすごく感動するストーリーです。また、登場人物の名前の由来 は、"柱(夫)"=大工さんだから、"雅(妻)" =いいひびきだから、"かんな(長女)"と" のこ(次女)"は大工道具からの連想というこ とで、特に人物名にこだわりがないそうで す。野崎さんに「作品を通して伝えたいメッ セージは何ですか?」と聞いたところ「想い は伝わる」と答えてくれました。それと一所 懸命描いているので、大事に読んでほしい といってくれました。

私の将来の夢はホテルで働くことです。そこでホテルマンとして、お客さんに満足していただくためにはどうすればいいでしょうか?と野崎さんに聞きました。野崎さんは「ホテルに行った時、ホテルマンがしていることで、『いいな!』と思ったことを見習い、ホテルで働き始めたなら、自分自身が『してくれたらいいな』ということをお客さんにするといい」と教えてくれました。

私にとって学校は、勉強や宿題のせいでストレスがたまるいやな場所だと思っています。野崎さんにとって学校とは何ですか?と聞きました。先生は「学校とは友達としゃべるなど、コミュニケーションをするところで人間関係を始めるところ」と答えてくれました。

【河田音珠さんの感想】

私はこのインタビューをさせていただき、 父や先生や野崎さんにとても感謝しています。このインタビューのおかげで、人それぞれに意見(ものの見方)は違うということを、 自覚するようになりました。漫画を読むときも、作者が一所懸命に描いているので、大事に読まなければならないと思いました。 インタビューを終えたとき、色紙に世界に一つしかない、のこちゃんの絵を描いていただき、とても嬉しくて感激しています。こんな 機会はもう二度とないと思っています。野崎 さんからいろいろなことを学べ、とても満足 できるインタビューでした。

【野崎ふみこさんの感想】

こういう形のインタビュー等は、実は初めてではありません。中学生の職業体験で、「漫画家を体験してみたい」生徒さんを家に呼び、制作過程や流れを現物を見せながら話したり、原稿の描き方、道具の使い方の指導をしたこともあります。

また、娘さんが漫画家になりたいとのことで、親子で見学に見えたりもします。そして、その時よく聞かれるのが「漫画家になるために今何をするべきか」。小学校、中学校、高校と「学生」のみなさんです。もちろん大好きな絵をたくさん描くことは必要ですが、自分がプロの漫画家になってみて実感するのは、「色んな体験をすべきだ」ということです。

そしてとにかく「いろんな人と出会うこと」。 コミュニュケーションを学ぶこと。

勉強をして、漫画を読み本を読み、ネットで知識を広めることも大事ですが、漫画とは人間を描くもの。人の感情を描くものです。人の喜び、悲しみ、怒り、頑張りを体感してこそ、心に響くお話が描けるのだと思うのです。

今回のインタビュアーの河田さんは、ホテルマン志望の快活な可愛い女の子でした。ホテルマンも対人間のお仕事です。同じようにコミュニケーション能力に磨き掛け、どうぞ、夢に向かって進んでくださいね!

まちも私たちの教室だ、 新しい価値を探しにまちへ出よう!

語り手:徳山高志さん(吉祥女子高等学校美術科教諭/NPO西荻まちメディア理事) インタビュアー:朝枝紗英子さん(西宮中学校1年・女子)





■はじめに

私は、「漫画」が好きなことから、「漫画」→ 「絵」→「美術の先生」と、徳山先生を紹介 していただいた。初めてのインタビューで、 緊張の連続だった。まず、徳山さんが美術 の先生になったきっかけを伺った。

■徳山さんが美術の先生になるまで

先生が生まれたのは、岩手県陸前高田市 (注)。今も年に1度は帰省するが、風景は 子どもの頃と変わらないということだ。ゆっ たりと時間が流れ、遊ぶことには事欠かな い自然の中で子ども時代を過ごし、自分で 工夫して遊ぶことを通じて、図画・工作に興 味を持ったそうだ。

とはいっても、先生は特別絵を描くことが 好きだったわけではなかったということだ。 でも、中学時代、魅力的な美術の先生に出 会い、アートに興味を持つようになったそう だ。高校生になっても、その先生の自宅ア トリエに通い、絵を学んで、その後筑波大 学大学院芸術研究科を経て、高校の美術 の先生になったそうだ。

そして、高校の美術科の先生になって、 10年ほど過ぎたころから、絵画からデザイン全般へと関心が広がったと同時に、多く の人たちが集まって、何かを創ることに興 味を持つようになった。

注:陸前高田(りくぜんたかだ)市 岩手県の東南部に位置し、東は大船渡市、北は住田 町、南は宮城県気仙沼市に隣接している。三陸海岸特有のリアス式海岸で、2kmに及ぶ砂浜が続く名勝高田松原を有し、陸中海岸国立公園の南玄関口。 年平均気温10℃を超え、シュロ、ビワなどが生育し、野性の椿が厳寒に紅い花を咲かせる県内では最も温暖な気候。人口:25,781人(平成17年4月1日現在)、面積:232,23平方キロメートル。(陸前高田市のウェブサイトより)

■子どもたちと「世の中」を つなぐことの大切さ

現代の子どもたちが接するおとなといえば、学校では先生、家では親しかいない。この両者の間にいるおとなと接する機会が少ない。これでは、世の中にどんな人たちがいて、何をしているのかが見えにくい。しかも、世の中のスピードは速く、仕組みもどんどん変わってしまう。そこで、徳山先生は、学校の先生でもない、親でもないおとなたちと接する子どもたちの場をつくろうと考えた。

確かに私が接するおとなは、親であったり、祖父であったり、学校の先生、小学校のときのバスケットのコーチという自分の身近な人たちだ。私たち中学生の生活は、学校と家庭だけで終わることが多い。私も他のおとなの人と話すことは苦手だ。ご近所の人など、あいさつはしても、会話を交わすことはほとんどない。

徳山先生は、私たちのような子どもに学校以外の、世の中のことを知ってほしいとおっしゃった。色々な価値観があり、評価の基準がある。物事には責任もついてくる。だから、プレッシャーも多いが、達成感も大きい。そういう自分たち以外の「世界」の人と付き合って、コミュニケーション能力を高め、客観的なものの見方ができることを望んでいらっしゃるようだった。

学校だけが「中心(場所)」ではなく、世の中にはいろいろな中心がある。たくさんの中心を知り、その中心をいくつも重ねることで視野がうんと広くなる。中心が違うとルールも違う。 たとえば、学校のサッカー部と地域のサッカークラブの違いをみると、学校で

は茶髪はルール違反でも、地域のサッカー クラブならOKというふうに、場所が違うと価 値観も違う。なるほど、と思った。徳山先生 は、学校だけが学ぶ場所ではなく、"まち" も教室だと考えている。学校の延長で、"ま ち"のあちらこちらに学ぶための素材がいっ ぱいあるから。



▲子どもたちに学校以外の世界を知ってほしいんで す。

■徳山さんの学校での活動、地域での活動

徳山さんは、学校の先生として、また、N PO西荻まちメディアの理事として、さまざま な活動をしている。

学校では、昨年から高校2年の美術コースの生徒たちが、デザインの学習を通じて地域の商店会と連携し地域の活性化のために一役買う試みが始められている。これは「CIプロジェクト」と呼ばれるもので、CIとは、コーポレートアイデンティティ(自分の会社やお店の経営理念や事業ビジョンなどをお店や会社のマークなどのデザインを通して世の中にアピールしていくための計画)のこと。

きっかけは商店会でイベントが行われたとき、ポスターや新聞などを作成して広報活動し、商店会の人たちと交流したことから始まった。生徒たちはグループに分かれて、担当する商店の店主に直接会い、商店の現在の様子、商店会の状況についての考えを取材する。

- Uspace - 10月28日 -

 \checkmark

えを取材する。

のれんやシャッターをどうしたらいいの か、商品に貼るシールをどのようにしたらい いのかなどについて話を聞く。生徒たちは その取材に基づき、店のイメージを考え、 パソコンなどを使ってデザインを創ってい く。そのデザインを店主に提案する。デザイ ンがまとまると、生徒は自分たちで創作した り、できない場合は地元の業者に頼んで創 ってもらう。ただし、店主が完成品を気に入 らなければ採用しないという条件付き。これ は、本当におとなの世界だ。学生だからと、 甘い評価をされるわけではない。デザイン する前に、お店のおじさんやおばさんたち と話をすることで、人間関係がつくられる。 話をしながら、相手が何を考えているか、 何を求めているかを考える訓練ができる。 お店の人と信頼関係がつくられると、最後 は「あなたの言うことなら信用できるから任 せるよ」という深い人間関係までゆくこともあ る。

2004年、その1回目が行われ、1グループ6人で5班に分かれて、お風呂屋さん、酒屋さん、蕎麦屋さんなど5つのお店で行った。2005年は「より質の高いもの(優れたもの)」をめざし、1グループ6人で3店について行い、1店を2グループで担当する。ただし、最終的には、2グループのうち1グループしか採用されないと、少しルールが厳しくなった。

先生の教えている美術コースの生徒はデザイン関連の職業に就く場合が多い。将来の職業を考えた場合、この試みはお店のためになるだけでなく、自分のことも考えるひとつの手がかりになる。徳山先生は、総合的学習と情報科をセットにしたものが「デザインの学習」だと考えている。さまざまな人と会い、交渉をすることは将来的に大きな意味があるからだ。生徒たちは、お店のおじさんやおばさんたちと共同でモノを創ることの大切さを学ぶ。いまは、その大きな意味がわからないかもしれないが、あとから「自分はとんでもなくすごいことをやったんだ!」と思える時がくる、と徳山さんは言う。



▲徳山さんの所属する「西荻まちメディア」が 昨年11月 12日から27日に行った"科学とアート・こどもフェスティ バル"のパンフレット

"地域のおとなとこどもが一緒になって何かをする、その体験がこどもたちの将来にきっと活きてくる"

地域のおとなと接したり、おとなたちと一緒になって何かを創ったりすることで、自分が動けば状況(自分のまわり)も変わることがわかってくる。それを続けていくと、たとえば、政治だって、自分が動くことで変えることができることがわかってくる。また、自分一人ではできないことでも、「こうじゃないの?」「こうすればいいんじゃないの?」とサポートしてくれる人が必ずあらわれる。そんなことも自分が動いて世の中と関わることでわかってくるということらしい。

西荻まちメディアでは、徳山さんは「コーディネーター(物事の調整・まとめ役)」「メディエイター(人と人、人と出来事とを出会わせる役)として活躍している。2005年の夏休みには、すぎなみアニメミュージアムで、夏休み工作アニメーション講座を担当した。これは、夏休みの工作で素材としてアニメーションを創ろうというもの。アニメーションのおもしろさは、木の葉や木の枝、何でも素材になるということ。また、工作で自動車を創ったら、完成したら終わりだけれど、アニメなら、今度は、その自動車を動かしてみる、さらにクラクションなどの音をつける、

といったように、一度創ったものを次々と創 り変えてることで、面白さが広がるという。

杉並区は、アニメミュージアムもあり、アニメエ房もたくさんあるので、アニメーションの普及に力を入れているが、小さな子どものうちから、アニメに親しんでもらうことで、アニメの可能性を知り、これまでなかった新しいアニメを作る人が出てくると期待しているとのお話。私は、漫画が好きだが、なかなか自分で「創る」というまではいかない。アニメの可能性も考えたことがなかった。

■その他

児童館や図書館などの公共施設は、区 民みんなのもの。みんなで使うものなら、ど のように使えばいいのか。みんなが使うの だから、気持ちよく使いたい。区(役所)か ら、「こう使いましょう」と言われるだけでな く、こちら(区民の方)から「こんなふうに使 ったらどうでしょう」と提案することが大切。 杉並区の公共施設の使い方は、まだ「頭が 硬い」ように感じる。いろいろ提案して、すこ しずつ硬い頭をほぐしていきたいと思って いるとおっしゃる。

子どもを育てるには自然のままが一番だと思う。でも、それがないなら公共の施設を利用することがいいというご意見だ。徳山さんが育った陸前高田の自然と比べると、都会の公園は美しすぎて、子どもが遊ぶ場にはふさわしくないと思う。子どもが好きなもの(がらくた)を持ってきて遊ぶこともできない。 最近は、おとながそこにいればたき火ができる公園などもできてきた。地域のおとなたちが積極的に関わることで、公共施設はもっとよいものになると思う。

【朝枝紗英子さんの感想】

私は、おとなと付き合うということを考えたこともなかった。でも、今日お話を伺って、いろいろなことを勉強できたと思う。たとえば、「アニメの可能性」について、私は考えたこともなかったし、今でもよく分からないが、ただただ面白いと自分が楽しむだけでな

- 収録日:2005年10月28日- 043 徳山高志さん

7

く、その先を考えることも必要なのだと感じ た。

また、先生の学校の試みのように、街の人たちと協力して何かを作るというのは、とても楽しそうだと思った。私は、今、ファッションにも興味がある。お金がないので、特に「古着」に興味がある。どんなお店を出したいか、夢見たりしている。たまに、インターネットで、古着などのサイトを見ている。きっと、お店を出すことは、お金のことや、立地条件など、難しいことがたくさんあるだろう。でも、もし、今、そういうことを少し具体的にして、計画を立てて、まちの人、学校の友だちとできたら、楽しいだろうな、と思った。

【徳山高志さんの感想】

「特例」が持つ「創造性」

当たり前と思われていることに対して、おやっ? と考えることが多くなりました。教育しかり、社会システムしかり。日本人はゼロからものごとを創りだすことが苦手と言われています。「答え」がない物事に対してエネルギーを傾ける時、私たちは前例に照らし合わされた答え=「慣例」と、その渦中に見出された答え=「特例」のふたつに直面します。

私は特例の積み重ねこそが、来るべき次 代のよりよいシステムを創っていくと考えて いますが、日本の社会システムは「特例」に 対して不寛容のように思います。これは前 述の「ゼロから創りだすことが苦手」という日 本人の体質と無関係ではないでしょう。実 は残念ながら、教育を通して、答えは与え られるものであって、見出すものではない、 という習性が染み付いてしまっていることも 一因です。しかし、若い世代は否応なく、 自分が創ったわけでもないシステムを背負 わされるのですから、その対価として、「特 例」を認める寛容さを社会が持たないことに は、若者は窮屈さの中で辟易してしまいま す。

「今のシステムが必ずしも最もよいものではない」という一種の危機意識を世代を超えて共有することで、「特例」の持つ創造性が

初めて理解できるのです。こんなことを様々な場所で、もっとわかりやすい言葉で、子どもたちにも大人にも伝えていかなければ、と改めて考えさせられたインタビューでした。朝枝さん、ご苦労様。でも、ちょっと難しい話になっちゃったね。

シェイクスピアの戯曲を "能"の手法で現代に蘇らせる鬼才演出家

語り手:宮城聰さん(永福在住・NPO法人ク・ナウカ シアターカンパニー理事長) インタビュアー:河田西欧さん(あおばインターナショナルスクール中学1年・男子)



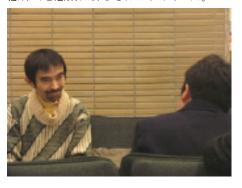


2005年11月9日、僕はこのインタビューを させていただくために、東京国立博物館・ 日本庭園へと向かった。中学1年の僕は、 母の趣味もありよく演劇や宝塚を見ていた が、今回のように、演出家の方に劇につい てのインタビューをするのは生まれて初め ての機会であった。

宮城聰さん演出の「ク・ナウカで夢幻能な オセロー」は、シェイクスピア原作「オセロ ー」を、能狂言などのシテ、ワキ、地謡、囃 子方などの手法を使い、ミュージカル仕立 てにアレンジした舞台。その魅力的な舞と、 美しい舞台後方の景色が、いいコラボレー ションを作り印象的だった。演劇はよく見て いたのだが、能は一度も見たことがなかっ たので、少し不思議な感じがしたのだが、 やはりストーリーはシェイクスピアのオセロ ーと一緒であった。この劇には、むしろ「オ セロー」というより「能」というイメージを持っ ていただけに、それにドレス姿のデズデモ ーナと、透明な色の服のオセローに洋を感 じ、ヨーロッパでも日本でもない透明な空間 を感じた。

一番印象に残ったのは、クライマックスの、オセローがイアーゴーの悪巧みに気付くシーン。やはり本を読んだときとでは迫力が違い、オセローの悔しさなどが伝わって

きた。しかし透明感という点では、オープニングの死の世界のほうが印象的であった。 あのシーンでは、青い、そして淡い色の照明が、未来でも過去でもない、浮遊しているような空間を作り、とても印象に残った。演じていた役者の人たちも、他の劇と比べると、いろいろ違う面があった。能狂言しか使わなかったのだから、相当な演技力とムードメイクの力がある。やはり本と演劇は違う。繰り返すが、迫力が違うし、自分が想像した本の中だけの世界より、演出家のほうが研究している。本の作家が考えたその背景に一番世界が近いのだろうし、自分と違う世界なのでフレッシュさもある。そういった意味でも感動は深まるばかりであった。



▲同じ作品でも伝えたい"思い"、"考え"は演出家によってちがってきます。この作品での私の"思い"、"考え"は……。

この作品を見たあと、宮城聰さんにインタビューさせていただいた。まず彼が演出家になろうとしたきっかけを尋ねた。それは高校の時の演劇部が原点だそうである。次に彼が演劇に使う楽器などの、入手方法について話しをした。小道具は無論そのテーマによって作るらしいが、楽器は海外公演などの先で買うらしい。公演期間中でも演出家は、次の公演の材料を探すのに忙しいそうだ。確かに公演中、能仕立てながらボンゴなどの国際楽器がよく活躍していた。ストーリーについても質問した。

まず能狂言の活用について、次にストーリーのテーマについて聞かせていただい

た。本来能などでは、主人公が孤独に死ん でいくのがパターンであるが、この舞台で は、孤独な死からくるつらい人生への後悔 を単なるテーマにしない。この演出では、ま さにこの孤独な死の後悔ではなく、この二 人(オセロー、デズデモーナ)は理不尽にも 殺されたけれど、二人は「世界の悪」を背負 って生きてきたことに気が付く。一人で悪を 背負って生きてきたのではなく、かけがえ のない伴侶、二人が同じ宿命を背負ってい た、孤独ではなかった、二人は同じ運命に 翻弄されて死んでいく、そこに救いを求め るという演出にしたかったとのことでした。能 の主人公は孤独に死んで幽霊になるという 無念な死に方をテーマにしているが救いの すくない能演出方法を変え、救いのあるス トーリーにしてオセローとデズデモーナの 内面を描く、それを強調するため、この救 いのなさそうな能狂言の手法を借りてこの 舞台演出を作ったと教えてくださった。

一番記憶に残っているのは、役者が、自分(演出家)の思う通りの役を演じきれないときにどうするか、という質問に対するお答えである。演出上絶対にそういうことがあるのは避けて通れないことだし、大きな問題だと思った。彼は、自分の思う通りでなくても、その人の思う演技でいいと言われた。それに人間は自分をころころ変えることができない、変わりたくないのが本質だとも言われた。この答えには驚かされたが、やはりよく考えてみると、役者だってそれなりに、「自分のあの人の人物像」というものがあるし、それは変わらないかもしれない。やはり演出家はある程度役者を許さなければいけない。そういうことも今回学んだ。

僕は今まで、演出はそんなに難しいこと ではない、苦労することでもないと思い続け てきたが、今回のインタビューで、演出家は ストレスもたまり、疲れる仕事、さらには苦労 - 収録日: 2005年11月9日- **044 宮城**聰さん

をして、それでも完璧に自分の望むとおりには行かないということがよくわかった。このインタビューを通じ、新たに演出への興味が深まった。

初めてだっただけに納得できるような質問はできなかったが、とても勉強になった。劇についての疑問なども晴れ、このストーリーをまた新たな眼で見ることができた。一つ一つのせりふに意味があるということは、我々自身の、人生一秒一秒に意味があるということによく似ている。演出は人生を作るような風にも考えた。人生を作る、それは劇を作る上で一番大事なことかもしれない。そういう意味でも、劇の中で演出家は、舞台の上では見えなくても、見なければいけない存在かもしれない。このインタビューを元に僕は今後、劇を見るときのせりふ一つつを、人生の一秒と同じくらいに真剣に考えたい。



▲「ク・ナウカで夢幻能なオセロー」パンフレット

僕は今まで、演出はそんなに難しいことではない、苦労することでもないと思い続けてきたが、今回のインタビューで、演出家はストレスもたまり、疲れる仕事、さらには苦労をして、それでも完璧に自分の望むとおりには行かないということがよくわかった。このインタビューを通じ、新たに演出への興味が深まった。

初めてだっただけに納得できるような質問はできなかったが、とても勉強になった。 劇についての疑問なども晴れ、このストーリーをまた新たな眼で見ることができた。一つ一つのせりふに意味があるということは、 我々自身の、人生一秒一秒に意味があると いうことによく似ている。演出は人生を作るような風にも考えた。人生を作る、それは劇を作る上で一番大事なことかもしれない。そういう意味でも、劇の中で演出家は、舞台の上では見えなくても、見なければいけない存在かもしれない。このインタビューを元に僕は今後、劇を見るときのせりふ一つつを、人生の一秒と同じくらいに真剣に考えたい。

【河田西欧さんの感想】

最後に僕が僕なりにこのインタビューを終えて思ったことを書きます。ただインタビューをすること、"ただ"と書きましたがそれは難しいことでした。しかし難しいだけではなく、自分の人生観、そして社会に対する視野さえ変えてくれる、すばらしい「友達」です。インタビューを子供が大人にすることも、逆に大人が子供にすることも、おかしいとは僕は一切思いません。こういうインタビューが将来に役に立つかもしれません。またこういった機会をいただけるのであれば光栄です。皆さんもこれをきっかけに、いろいろな人にインタビューしたらいかがでしょうか。

【宮城聰さんの感想】

河田くんのインタビューを読んで

自分はなぜ演劇をやっているのかと考えることがあります。

始めたきっかけではなく、続けている理由です。(なにかを始めるきっかけというのは案外と他愛ないことが多いと思います、そして始めたことにではなく続けていることにその人なりの必然性があると思うのです。)

そしてその答は、僕の場合、ふたつ導かれます。ひとつは、自分を変えたいから。もうひとつは、自分を知りたいから。

こう書いてみると、なんだか矛盾しているように見えますね。

すこし詳しく追ってみましょう。

僕は、いまの自分というものに満足できま

せん。いまもそうですし、これまでもずっとそうでした。

これは自己嫌悪とか、自己否定というものとは違います。ある意味では、自分の存在を肯定しているからこそ、「もっとましになりたい」という気持ちも強くなるのです。「存在を肯定している」というのはどういうことかというと、「自分」というものは、そのほとんどが僕がつくったものではなく、ひとことで言えば「自然」が作ったものであって、その奇跡を「すごい!すばらしい!」と感じるということです。言葉を換えれば、自分という生命体は、宇宙から、存在を許されている、という感覚です。自分がこの世界に存在していること自体がひとつの「祝福」である、と。

でもこのすばらしさは、地球に生命体が生まれてからの45億年によってもたらされたものであって、自分の力で獲得したものではありません。そして、「自分の力で獲得したもの」は、それと比べて、あまりにも不完全です。いや、比べることもおこがましいのですが、というか「比べて」という言い方は適切でないのですが、ともあれ、この自分の力でやれるはずの部分については、もう少し何とかならないものか、と思ってしまうのです。「けっこう良くやってるじゃないか、僕って」なんて、とうてい思えません。(つまりそれは望みが高いということかもしれませんね。)

いまの自分にいつも満足できないから、 無理やりにでも自分を変えたいと思います。そのためには、なにか、自分以外のものと、出会う必要があります。自分以外のもの=他者ときちんと向き合うことで、自分は変わらざるをえなくなる、と。

でも、もしその「他者」が人間であったなら、その人と自分が真剣に向き合った時、自分だけが変わるということは起こり得ません。必ず、お互いが、変わるものです。そして、こういう事を求めて世界のいろいろなところで芝居をしてきて、つくづくわかったことは、ほとんどの人は自分が変わることを恐れている、ということだったのです。

・・・それは、実は僕自身も含めて。

- 収録日:2005年11月9日-044 宮城聰さん

自分に満足しているひとはまれでしょう。 いまの自分とは違う自分になりたいと、多く の人が思っていることでしょう。そしてそうい う体験をひそかに期待して、劇場にも、海 外旅行にも、足を運ぶのでしょう。ところが、 そうした旅(劇場に行くことも、芝居をするこ ともその意味で旅なのですが)に出ても、ひ とは、たいていの場合、自分を巧妙に守っ てしまうのです。ほんとうは自分の知らない こと・これまでの自分では対処しきれない事 態、に出会っていても、従来の枠組みのな かで処理して済まそうとします。・・・いや、こ うした「悪知恵」を身につけていないうち、 すなわち青春期は違います、青春期の旅 はほんとうの旅です。恋愛も、芸術体験も、 そのひとをどんどん変えてゆきます。きっと 青春というのは、神様が人間に「自分を変 える勇気」を与えた特殊な一時期のことな のです。でも、誰においてもこの一時期は 過ぎ去り、誰もが青春を懐かしみます。そし てそのときには、自分を変えないで済む知 恵を、つまりは自分を危険にさらさないで済 む、自分を動揺させないで済むための知恵 を、身につけているのです。

こうして、自分を変えることの困難を知れ ば知るほど、いっそう、そういう奇跡的出会 いを求める気持ちは強くなりました。そして 確かにこれまでに何度か、ほんとうに自分 のものの考え方を根底から揺さぶられるよう な、言い換えれば自分という存在そのもの の祝福をはっきり感じるような、そういう「旅」 を味わいました。(たとえば、チベットでの公 演がそうでした。)

いま、自分を変えるには、他者と出会う必 要がある、と書きました。そして、実は「他 者」と出会うことを僕自身がとても恐れてい て、そして相手もそれを恐れていて、だから そういう出会いはなかなか起こらないとも書 きました。

ここで言う「他者」とは、つまり、自分にとっ て違和感のあるもの、という意味です。ひと は、楽に生きていけるようにするために、生 きること自体で消費するエネルギーを少な く済ませるために、日々の生活でなるべく 「違和感」を感じないように感じないようにと 自分を訓練してゆきます。それが上記の 「悪知恵」です。またいまや、たいていのひ とが、「こわい」とか「アブナイ」とか「キモい」 とか「引く」とか「暑苦しい」とかいう言葉を使 って、自分に違和感のあるものを徹底して 排除しようとします。つまり、自分自身にバリ アを張りめぐらせて外界とじかに触れないよ うにする一方、外界のほうも、なるべくクリー ンに、つまり自分の感覚だけで対処できる ように、掃除しておく。結局、誰もが「閉じて いる」現代社会が、こうしてできあがってい ます。

でも、改めて考えてみると、こうして塀をめ ぐらせて守っている「自分」というものを、僕 らは、どの程度知っているでしょうか?

むしろ僕はときどきふとしたひょうしに、 「自分」が、とんでもない怪物、それは大き いという意味ではなく、見たことのない奇妙 なバケモノ、であるように感じることがありま す。誰でもそうではないでしょうか? 自分 というのは、なんだか、いつまでたっても、 よくわからないものではないでしょうか?

ということは、実のところ、「自分」こそはい ちばん身近な他者、つまりは違和感の固ま り、だとは言えないでしょうか? そして僕 自身は、僕のなかから吹き出す衝動を観察 してみるとき、他者と出会いたいという欲望 は「自分とは何かを知りたい」という欲望と 重なっていることに気づくのです。いちばん 違和感のある存在、いちばんの他者とは、 自分のことではないかと。

はてな、と思われる方もいるでしょう。自分 を変えるために他者と出会う。その他者と は、最終的には自分のことである。とする と、「自分」と出会った「自分」はどうなるの か?当然、変わってしまうのではないか?

そのとおりだと思います。自分を知ろうとし て自分に深入りすればするほど、その自分 は変わってゆく。つまりは、自分というもの は、一生、つかめないということになります。

これを僕は空しいとは思いません。むしろ この謙虚さに、到達したいと願っています。 自分は、無い。把握すれば把握するほど、

つかめなくなる。人間というのは、こういう、 根本的にパラドクスをかかえた存在なのだ ろうと、いまは思っています。

カウンセリングとは、その人の気持ちに寄り添い、 一緒に考えてあげること

語り手:渋谷(しぶたに)英雄さん(高井戸在住 臨床心理士・学校心理士) インタビュアー:三橋ゆきこさん(アオバジャパン・インターナショナルスクール・中学1年・女子)





■カウンセラーの喜びと苦労

今回私がインタビューさせていただいたのは、臨床心理士・学校心理士の渋谷英雄さんです。私がお話を伺ったのは、吉祥寺の東急百貨店の中に入っているピースマインドというカウンセリングルームでした。

カウンセリングというのは話を聞きながら、 一緒に解決していくことだと、渋谷さんは話 してくれました。相談にきた人が自分自身 で問題を解決できるように、人間的に成長 できるように、お手伝いすることだ、と。

カウンセラーになって良かった、と思うのはどんな時ですか、という私の質問に、渋谷さんは「風の噂で自分がカウンセリングした人が元気になったということを聞いた時」と答えてくれました。一方、つらいことは、その日聞いた色々な話を思い出してしまうことだそうです。そういう時、どうやってストレスを発散しているんですか、と聞くと、お風呂の中に潜って大声を出すとスッキリするよ



▲ぼくも人間だからストレスは溜まりますよ。ぼくのストレス発散法はね・・・。

、と答えてくれました。

その後私も一回試してみたのですが、確かにスッキリしました。カウンセラーになった理由は、昔、不登校になってしまった高校生と知合いになったこと。色々と応援したが、結局その人は学校には行けなかったままでした。人を助けてあげたいという情熱だけでは駄目なんだと思い、一から勉強をしなおしたそうです。

ピースマインドのホームページを見てみると、色々なカウンセリングがあることがわかります。そこで、私は、苦手なカウンセリング、割と得意なカウンセリングはありますか、と聞いてみました。「やはり、一番難しいのは恋愛関係の相談。得意なものは・・・敢えて言うなら、不登校の子どものカウンセリング」だと話してくれました。

不登校の人達は、学校に行きたいけど、 行けないという人が多いそうです。理由は、 対人緊張。「今、三橋さんは緊張しているで しょう? じゃあ、それが十倍くらいの気持 ちだったらどうだろう?とても学校には行け ないし、他の人と話せないよね」。学校に行 けないという気持ちを受け入れてくれる人 が周囲にいないというのも問題です。本当 は親が受けとめてくれればいいけれど、そ れができないことが多いそうです。「親の代 わりになる、ということですか?」という質問 には、「いいえ、なれないです」と言ってい ました。やはり、一番身近な「親」という人が 子どもの気持ちをわかってあげて、受けと めてあげる必要があるんだな、と感じまし た。

■「質問ボール」で会話のきっか けづくり

私は、将来自閉症の人を助けるような仕事 をしたいと思っています。渋谷さんは、自閉 症の人に直接関わったことはなくても、そう いう人達の親御さんの相談を受けたことは あるそうです。やはり、自分の子どもが自閉 症だと受け入れたくない、というケースが多 いそうです。また、一番自閉症の人を助け てあげられる職業は小児科の医師、障害児 教育施設、養護学校などで働く人だ、とも 教えてくれました。お話の途中で、私が用 意していった質問がなくなってしまいまし た。すると、こういうこともあると思って・・・ と、渋谷さんが何かゴムボールのようなもの を取り出しました。青くて、色々とパステル カラーで文字が書いてあります。「質問ボー ル」。質問や指示が色々と書いてあり、それ をキャッチボールのように投げ合います。キ ャッチして、パッと目に入った指示や質問を 読み上げます。「深呼吸して肩の力を抜い てみよう」「三回ジャンプして」「やればでき ると三回言ってみて」「困っている友達がい たらどうする?」「問題が解けた時、どんな 気持ち?」など。ちなみに、これは初級で、 上級など、色々なバージョンがあるそうで す。

【三橋ゆきこさんの感想】

今回このインタビューをさせていただけて、本当に良かったです。今まで、「カウンセラー」というのは、なんとなく固いイメージがありましたが、お話を聞いてみて、必ずしもそうではないことが分かった気がします。困ったことがあったときに、話を聞いてもらって、受けとめてもらって、一緒に解決していってくれる人。必ずしも、私の思っていた「本当に深刻な問題を抱えていて、どうすればいいのか分らなくなってしまった人」を助けるだけではないんだな、と思いました。

私がやりたいと思っている、障害児教育についてのお話も聞けて、本当にためになりました。今回聞いたことをいかして、これからのことを考えていきたいと思っています。

- 収録日: 2006年3月25日- 045 渋谷英雄さん



【渋谷英雄さんの感想】

目に見えない「心」に関するテーマだけに、取材の苦労も多かったと思います。しかしインタビュアーの三橋さんは、心のテーマについてよく勉強されていたので驚きました。またとても感性豊かな方で、こちらもホッとしながお話しすることができました。助かりました。

今回は障害児教育のことを含めた取材でした。私たちの町にもハンデキャップと付き合いつつ暮している人がいます。ときどきフッと「たまたま自分が大きなハンデキャップを持たずに生活できているだけ」だと思うときがあります。困ったときはお互い様の気持ちがあれば、もっとできることが見えてくるような気がします。

何事も目標をもって努力する事の大切さ…

語り手:有坂好司さん(國學院大学久我山中学高等学校 陸上競技部顧問・長距離コーチ) インタビュアー:野口 しほりさん(高南中学3年・女子)、成清 友理さん(高南中学3年・女子)





■有坂さんについて…

有坂さんは現在國學院久我山高等学校の陸上競技部長距離コーチ。國學院久我山高校が母校で、高校1年生の時に、足の速い先輩に引っ張られて、補欠で全国大会に出場。全国大会の会場では「ここで走りたい」と強く思った。しかし、2年、3年では、都大会で連続2位と、全国大会に出場することができなかった。その悔しさが現在(コーチ)につながっているという。

■陸上競技は高校から始めて も伸びる

・中学でバスケットボールやバレーボールをやっていて、高校に入ってから本格的に陸上競技(長距離など)を始めても伸びる生徒は数多くいる。教え子の中には、中学時代にサッカーをやっていて高校から長距離を始め、都大会で4位に入賞した生徒もいる。反対に、中学生から陸上を始めても、高校生になって伸びない生徒もいる。その要因として、十分に体ができていない成長段階で無理なトレーニングなどをして体をこわすことがある。

- ・中学から本格的に陸上を始めるのもひとつの手ではあるが、いろいろなスポーツをやってみて、自分の得意なものを見つけるのがおすすめ。中学時代に苦しいばかりのトレーニングをして、"すりきれ症候群"になっては意味がない。
- ・成長期や中学時代において『走る力』は

体の成長とともに伸びるもの。1500メートル 走のために、ただ、1500メートルを走るだけ でなく、スタートダッシュの練習をしたり、サッカーやバスケットボールなどをしながら走 る力を高めるのも大切だ。



▲どんなスポーツでも、まず、体をつくることが大切で す。色々やってその中から自分の得意なものを見つけ るのもいいと思いますよ。

Q有坂さんが陸上を始めたきっかけはなんですか?

A進学した中学に野球部がなく、友人が陸上部に入ったので、陸上部に所属した

Q陸上を始めて楽しかったこと、嬉しかったことはありますか?

A健康になったこと、友達が増えたこと Q逆につらかったことなどはありますか? A中学・高校と専門的でハードな指導だっ たのでつらかった。それでもやめなかった のは、目標があったから。よくオリンピックに 参加する選手が「オリンピックを楽しんでき ます」というのは、よく分かる。競技そのもの が楽しいというより、目標に向かって努力す ることが楽しいからだと思う

■陸上をやるうえで大切なことってなんだろう…?

- 1)一生懸命練習すること
- 2) きちんとした生活
- 生活のリズムを整える
- •食べ過ぎない
- 夜更かしをしない
- 3) 基本は「練習・休養・栄養」。週に1日は

ゆっくり休むことも大切。

Q試合の前日、試合の日の朝に食べると良 い食事とは?

A長距離では、持久力をつけることが大切なので、食事ではおもちやカステラなど炭水化物が多いものがおすすめ。特に試合前日などは、消化の悪いもの、普段食べなれていないものは食べないこと。 試合前はプラスになること以上に、マイナスになることをさけるようにする。そして、強い選手の真似をすると良いといわれた。

また、朝は、洋食よりも和食のほうが良いそうだ。家庭科でも習った『一汁三菜』を心がける。

Qよく、陸上選手はコーラを飲んではいけないといいますが、本当ですか?

A本当です。それは、コーラそのものではなく大量の糖分が含まれているから。練習後などにコーラを飲むと、糖分でお腹がいっぱいになってしまい、食事が十分にとれなくなってしまい、栄養のバランスが崩れるから

Qどうしたら速くなれますか?

A正解があったら私の方が教えてほしい …。ただ、速くなるためには走ることが好 き、もっと速くなりたい、と思う気持ちが大事 で継続して努力することにつながると思う。 選手の素質には2種類あるそうだ。1つは 生まれつきもっている体の素質。もう1つは "努力する"素質。努力する素質があれば、 1回1回の練習の積み重ねで自分の限界を 破ることが出来る。体の素質があるのに努 力が足りず、伸びない生徒も少なくはな い。『走る素質(体の素質)』は見ればわか る。けれど、『努力する素質』は時間をかけ て見ていかないとなかなか分からない…と のこと。ただし、長距離が速くなるのは体の 素質が全てではない。体の素質に恵まれな くても努力でカバーできる部分が大いにあ る。

- 収録日: 2006年3月15日- **046 有坂好司**さん

Q速くなるためのトレーニングはなんですか?

A走る速さ、距離、本数などの練習で強弱をつけること。ただ走るだけでは意味がない。同じ距離を走るのでも趣旨がちがうので、よく考えてトレーニングすることがとても大切。

【野口しほりさんの感想】

私が初めて知ったことは、2つあります。1 つ目は、元々の力…生まれつきもっている 体の素質と、努力する素質という2つの素 質があるということです。「本当なんだなあ」 と思いました。生まれつき素質のある人な ら、少しがんばれば結果が出るはずです。 努力する素質がある人は、すごいと思いま す。『努力』なんて、そう簡単に出来ることで はありません。本当に、『陸上がやりたい!!』 『陸上やっていて楽しい!!』と思わなけれ ば、結果は出ないと思いました。有坂さんも そうおっしゃっていました。

2つ目は、男の選手、女の選手での教え 方の違いです。男の選手は、マンツーマン では教えられないそうです。強くなればなる ほど、『ほっておいてつ!!』という感じだそう です。一方、女の選手は、マンツーマンの 方が良いそうです。女の人は、独占欲が強 いため、他の選手をみていると、『私はっ ?!』となるんだと思います。だから、外国の 選手は、奥さんが走り、旦那さんがコーチと いう形が多いです。一般的に見た、男女の 考え方の違いだと思いました。

私が有坂さんに教えていただいたことは、 "目標をもって、努力する大切さ"ということ です。『目標をもって目標を楽しむ』とおっ しやっていました。そして、人生においても "目標"は大切、だから目標をもって努力す ることが大切、と教えてくださいました。私 も、これから目標をもって、日々少しずつで 良いので、目標に近づけるようにがんばっ ていきたいと思いました。有坂さんは、陸上 のことだけでなく、生きていくうえで大切なこ とを教えてくださいました。

【成清友理さんの感想】

有坂さんのお話を聞いているうちに陸上競技をやってみたいと思いました。私は今回初めて知ったことが2つあります。1つ目は中・長距離の向き不向きは体の筋肉の割合によってきまるということです。筋肉は、大きく分けて縮む速度の速い筋繊維である『連筋』と縮む速度の遅い筋繊維である『遅筋』の2つがあります。遅筋は縮む速度が速筋の2分の1ですが、速筋よりも持久力にすぐれていて、また疲れにくいという性質を持っています。そのため遅筋の割合が大きい人は持久力を必要とする長距離に向いているということです。

2つ目ですが長距離は高校から始めても 伸びるということです。私は現在陸上部に 入っていないので、もう高校から始めても遅 いと思っていましたが、そんなことはないと 聞き安心しました。有坂さんの教え子の中 には中学時代サッカーをやっていて高校か ら長距離を始め、都大会で4位に入賞した 生徒もいたそうです。

有坂さんのお話の中で印象に残ったことは、「陸上競技をやって、『目標を持って努力すること、取り組むことの大切さ』を学んだ」とおしゃっていたことです。これは何事も同様だと思いました。私はこのインタビューで聞いたことや、学んだことを生かし、これから目標に向かって努力していこうと思います。

【有坂好司さんの感想】

今回、お二人が目標を持って努力することの大切さを学んだと感想に書いていただきうれしく思いました。私自身もお話をさせていただき、初心に返ることができました。ありがとうございました。家に帰り、改めて目標について自分でも考え、國學院久我山高校が全国高校駅伝大会で上位を争えるよう、また、将来、日本代表として世界の大会で走れる選手を育てられるよう、陸上の指導をがんばろうと思いました。野口さん、成清さんも自分の可能性を信じ夢.目標に

向かってがんばって欲しいと思います。